ガーナの森林にて

森は、生活の中心を森林環境にしている人々を除けば、日常生活とは少し離れた環境である。故に、新鮮な出来事が多く、それが森林の魅力の一つとなっている。森林を歩くと新しい発見があり、見慣れない樹木や野草、時として動物に遭遇するなど、興味深い現象を体験することも多い。

私はまだ若かった20代（2002～2003年）に、ガーナの森林を半年ほど調査したことがあった。ケッペンの気候区分によればガーナは南部の熱帯モンスーン気候から北部のサバナ気候まで分布しており、私はその中のサバナ気候の地域においてチーク人工林を調査していた。調査は私を含め５人くらいのスタッフで実施した。現地森林官１名、ガイドを頼んだ村人の皆さん２名、運転手兼調査補助の方１名、そして私だ。スタッフ５人、チーク林をズンズンと歩いて、程よい場所でエイヤと樹高と直径を測定することを毎日くりかえしていた。

調査していたチーク林は高さが10～30ｍくらいある落葉高木で、林床（森林の下層部）は解放されており、ちょうど日本のよく手入れされたスギやヒノキ林を想像するとよいと思う（写真①）。樹冠（森林の上層部で、葉が茂っている部分）が閉じているが、チークの葉は薄く、光を通すので、日本の暗い針葉樹林より、さわやかで心地よい感じの森林であった。

森の掟

もともと、森との生活の歴史が長かったと思われるガーナの住民の間には、我々にはわからない森の掟が多数存在する。まず、なぜか水曜日には調査してはいけないと森林研究所の研究員や森林官から言われた。理由は当時の私の英語力では理解できなかった。とにかく水曜日には森に入ってはいけない掟があるらしいのだ。

ある日、チーク林を目指してズンズンと歩いていた時、ピタリとスタッフが止まったことが

写真①チーク林の林床

あった。「なに?、どうしたの?」と私。「ワタナベ、この先は行ってはいけない」とスタッフ。見ると何か人工的な物が遠方の森の入り口、木の幹にぶら下がっている。

「これは呪いだ、まずい、この森には入ってはいけない」スタッフがささやく。スタッフの真剣な顔つき、私もこれはまずいと感じる。確かに我々は踏み入ってはいけない所に入りかけたようである。とにかく、そこから戻り、どっと疲れた我々は、その日の調査を早々に終了した。

アフリカの他の地域でもそうであるが、ガーナではみな呪いを信じており、その呪いの種類にもよるが、とてつもない災難が降りかかるそうである。そして、それは降りかかってみないとわからないそうである(写真②)。

写真②森で見かけた絵、この絵は無害

ガーナでは、不思議な力が森林に宿っている。我々は掟に従い、呪いを掛けられないように調査をおこなわないといけないのだ。

あやしい生物

ただでさえ日本より人口密度が低いガーナの、さらに人口が少ない田舎、そのまた更に人がいなさそうな森での調査である。まず、人には遭遇しない。むしろ人に遭遇したら、それは盗伐者の可能性もあるので、会わなかった方が安全であるかもしれない。我々は人にはあまり会わなかったが、様々な生物にはよく遭遇した。その経験を以下に記したい。

森林で調査をして出会う様々な生物の多くは無害であるが、いくつかは調査の進行を中断する。しかし、そのような生物は記憶に残り、今となっては良き思い出である。

チーク林調査は、樹木調査と並行して、土壌の調査とサンプリングもおこなうのであるが、そこで私を悩ましたのはシロアリである。私はシロアリの専門家ではないので詳しくは解らないが、おそらく地中に空間を作り、キノコを栽培するタイプ(キノコシロアリ)であると思われる。

この地中にあるシロアリのキノコらしきものは、握りこぶしくらいあり、やたらと土壌サンプルに混じってくる。このキノコにぶつかった

ら、キノコ成分の影響が土壌の化学分析等に強くでるので、サンプリングをやり直す必要がある。まぁこれも自然な土なのだから、キノコも土だ！と考えればよいが、どう考えてもその周りの土壌とは違うので、小心者の私としは悩ましい所である。

余談になるが、シロアリは塚を作る種類のものが有名であるが、この塚は乾燥地に行くほど大きなものになると思われる。乾燥地ほど、日中暑いので、どうしても大きな塚が必要になるのであろうか？塚が大きいと涼しいのか？と疑問が発生するが、だれか教えて欲しいものである。

あるときは、チーク林でコブラに出くわしたこともあった。コブラというのは、本当に想像していた通りとぐろを巻いて、シャーシャーと舌を出し、とびかかりますよ～という姿勢をしているのだと感心した。

さぁどうしようかな？と思っていると、突然、何の打ち合わせもなく、スタッフの全員が近くの枝を切り出し、50cmくらいの適当な長さにそろえ、遠方からブーメランを投げる要領でビュンビュンとコブラめがけて枝を投げ始めた。5～6発くらい投げた後だったか、コブラはどこかへ行ってしまった。そして我々は、進行方向を変えることなく、森を進んでいった。

ガーナの男（正確にはアシャンティ出身の男）たるもの、コブラを除けさせるくらいの技量は標準装備なのだろうか？日本男児の私は、マムシに遭遇したとしてもこのような技量はなく、ただただガーナの男に感心するばかりであった。

森の歩き方

道なき森林を歩くには、それなりのルールがある。特に、問題なのは道に迷うこと、帰り道が解らなくなることである。当時はGPSなんて物はなく、紙の地図を見ながら移動した。当然、携帯電話もなかったので、迷ったら致命的あった。

ここで重要なのは、幹に印を付けながら進んでいくことである。帰りはその印をたよりに戻ればよい。ただし、注意しないといけない事がある。それは、帰りに印がよく見えるように進行方向とは逆側の木の幹へ、だいたい目線の高さに印を付ける必要がある。ナタで樹皮が削れる程度に20～30cmつければ十分だ。間違っても、進行方向手前側に付けると帰りに幹の印は逆側にあり印が見えない。特に、均一で景色の変わらない人工林を歩くときは、この方法が有効である。

印を付けながら森林を歩いていく方法は世界的にも一般的らしく、日本で森林調査に同行した時も、片手に剪定ばさみをもって、チョキチョキと枝葉を切りながら進行していった。4人くらいで同じ行動をしながら森を進むと、振り返る

と道ができており、帰りはそれに沿って帰ればよいのだ。

では、仲間とはぐれてしまったらどうすればいいのか？も書いておこう。ガーナではオオカミの遠吠えと猿の叫び声を合わせたような、やや高めの声で「フォー！」と合図を送っていた。チーク林調査中、遠方で音がした時も、この遠吠えをすると、向こうからも同じ遠吠えが帰ってきて、「あ、人間だ」とスタッフは安心して進んでいった。この遠吠えシステムもアシャンティ出身の男には標準装備であるのだろう。

森林を歩くという事は、山登りをするという事とは違った魅力があるように思う。それは、まるで、未知なる世界へ進んでいく冒険のような感覚である。ガーナの後、私は様々な森林を歩いたが、その体験はどの森林を歩いても同様の興味と冒険を私に与えてくれた。

渡邊芳倫